

# 軍 事 史 学

第48巻 第1号

## 巻 頭 言

### 赤十字の原点

近衛忠輝

赤十字は、人道の立場から「戦場において敵・味方の別なく傷病者を救護する」ことを目的として、一八六三年にスイスで設立されました。一八五九年のソルフェリーノの大会戦に遭遇し、「戦場にも慈悲を」というアンリ・デュナン（Henri Dunant）の祈りを実現したものです。赤十字のマークは翌年、条約によって中立のシンボルとされ、各国には相次いで赤十字社が設立されました。

日本赤十字社の前身である博愛社設立のきっかけとなったのも、一八七七年の西南の役の戦場でした。その後、次々に起きる戦時の救護に必要な人材の確保を迫られた日赤は、研修の場として赤十字病院を各地に設け、現在は九二の病院と六か所の看護大学や専門学校が、救護の人材の養成と救護の拠点としてその役割を担っています。

日赤は、日清・日露・第一次・第二次大戦と、国や軍の方針の下に医師や看護婦らで構成される救護班を各地に多数派遣し、多くの負傷兵を救護しました。しかし、そのほとんどは日本の軍人であり、中立の立場で、敵国の兵士や住民を救護するという場面は限られていたようです。

戦後、日赤の紛争時の救護活動は国際赤十字の枠内で行われることになりました。一九九〇年の湾岸戦争では、日本政府からの救護班派遣要請を断り、赤十字国際委員会（ICRC）の下に、一〇人からなる救護班を派遣しました。赤十字の原則である「独立」と「中立」の下で活動する方が相応しいと判断したからです。

戦時救護が主な任務であった日赤が災害救護にも携わるようになったのは、一八八八年の磐梯山噴火の際、「昭憲皇后」から救護員を被災地に派遣するよう、直々の「下命を受けてからです。それ以来、国内外での災害救護が日赤の活動の柱となり現在に至っています。昨年三月十一日の東日本大震災に際しては、全国から七、〇〇〇人以上の医師・看護師が被災地に出動し、半年にわたって活動しました。

日赤は災害救護、医療、献血のイメージを強く持たれていますが、国民保護法の下で我が国が紛争に巻き込まれた時の役割が定められており、国際人道法の普及も重要な役割の一つとなっています。今後も赤十字が紛争の犠牲者の救護のために生まれたいという原点を忘れることはないでしょう。

（日本赤十字社社長）